



## 『関西企業ヒストリア』

～その強さの秘密・転換点を探る～

創業から70年以上の歴史を重ねる会員企業を取り上げ、時代の荒波を乗り越えて、長い期間にわたって生き残り成長してきた強さの秘密、その歴史の転換点を探ります。

### 第10回 創業 1938年(昭和13年)

## TONE 株式会社

### 前田金属工業の誕生 陸軍航空本部管理工場となった戦時中

**1938年**▶ TONE株式会社は、創業者の前田軍治が1938年8月に前田金属工業株式会社を設立したことに始まります。前田金属工業は、ソケットレンチおよび単能レンチ(T型レンチ、T型フレックスレンチ、L型レンチ)の専門メーカーとして発足。その前身は、軍治の個人経営だった機械工具を製造・販売する前田軍治商店でした。

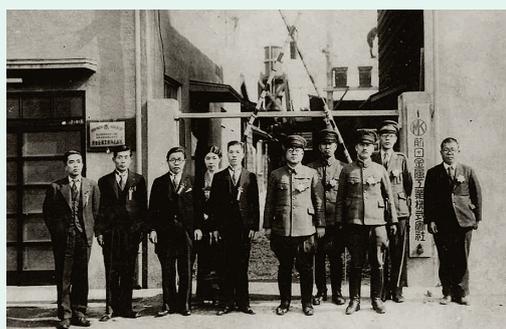


前田軍治

1925年1月に大阪市福島区で開業した前田軍治商店は、当初はペンチを主力に取扱う機械工具卸商で、開業した地が自動車部品店ばかりということもあり、軍治はフォード代理店とシボレー代理店に出入りするうち、舶来の自動車サービス工具の魅力に惹かれていきました。いつしか軍治は、将来は自分の手で自動車整備用工具を製作し、その製品にユニークなトレードマークをつけたいという夢を抱くようになりました。これが機縁となり、あらゆる研究努力の末、「TONE」の商標でソケットレンチの製品化にこぎつきました。

軍治は後に発行する30周年カタログ(1968年発行)で、当時のことを「自社製品を世に出し商標を考える際フト浮かんだのが、日本一の坂東太郎のことです」と記しました。坂東太郎とは利根川の異名で、「坂東(東日本)にある日本一の大河」を意味します。利根川の主流は日本の中心地である関東平野の大半に及び、灌漑や水運など、重大な役割を担ってきました。軍治は日本一を標榜する意味で、利根川から「TONE」と名付けたのでした。

1935年以降、機械工具類の需要は日を追って高まり、積極的な生産体制の確立のため、1938年8月、大阪市東成区深江に前田金属工業株式会社を設立しました。当時の生産品種は、民需用として自動車、船舶、電機、建設関係の工具類が中心でした。また、軍需用として陸軍航空本部より航空機整備用工具の受注生産も行っていたため、1940年に陸軍航空本部の監督工場に指定されました。翌年3月には陸軍航空本部から生産拡充指令が発せられ、軍需品生産に切り替え、その2か月後にはさらに陸軍航空本部管理工場の指定を受けることになりました。戦時中の混乱と紆余曲折を経て、1948年8月、大阪市東成区に本社を移し、再び前田金属工業として躍進できたのは1950年代半ばのことでした。



資料に明記されていないが、陸軍航空本部管理工場の指定を受けたときに撮影したものと思われる。

### 米国製1,000t高速精密鍛造プレス 業界初導入で大きな注目を集める

**1962年**▶ 1962年には、米国から最新鋭の1000t高速精密鍛造プレス機を輸入し、業界関係者から注目を集めました。しかし、この1,000t高速精密鍛造プレス機による製造で成功を納めるまでの道のりは困難を極めました。

この設備に要した資金負担は1億円を超え、長期にわたる経済ロスを招きました。社員の運転工作技術習得にかけよう努力もあり、1965年以降はようやくプレス機本来の能力を発揮し、生産を軌道に乗せることができました。これを契機に、鍛造設備と並行して、仕上げ、機械加工、熱処理などの設備についても、自動化・単能化など高能率化に役立つ諸施設を次々導入し、品質性能の向上につとめる体制を整えました。

1963年5月、前田金属工業にとって大きな出来事がありました。自動車機械工具の製造開発に功績があったとして、前田軍治が藍綬褒章を受章するという栄誉に輝いたのです。幾多の困難を乗り越え、優秀な製品を世に送り出していることが高く評価された結果でした。

同年5月8日には、株式を大阪証券取引所第2部に上場しました。これに弾みをつけ、資本の拡充、設備の合理化・近代化に努め、大量受注に対応できる体制を本格的に整えました。



1,000t 高速精密鍛造プレス

## 新製品の開発に創意工夫

**1968年**▶ 1968年、前田金属工業は設立30周年を迎え、その記念イベントとして祝賀会を盛大に開催しました。30周年を記念する製品カタログは、純白で特別感のある表紙デザインで彩り、大きな節目に華を添えました。この30周年カタログの誌面で、軍治は『社会の発展と作業工具の役割』と題したコラムを掲載しました。「人間は道具をつくる動物であり、旧石器時代に誕生した石でできたオノやナイフは現在の工具のルーツになっている。工具は、現代と未来の機械文明のなかで、人間が人間としての生活を築くために、いつまでも必要な道具といえる。」コラムにはこのような内容がつつられており、軍治の工具に懸ける想いが込められていました。

1970年代に突入すると、自動車用、各種作業用としてだけでなく、各種サービス業や飛行場、造船、自衛隊、農業、家庭などあらゆる分野でTONEの存在が強くなっていきました。1970年代後半の主力商品はソケットレンチ、スパナ、めがねレンチといったベーシックツールでしたが、自動車メーカーから受注する車載工具も多く、L形ホイールナットレンチ

だけで月産10万本を超える時期もありました。また、空動から始まったトルシア形高力ボルト締付機「シヤーレンチ」は電動が主流となり、1977年に投入した現在の基本形となるモデルの好評を受け、さらなるラインアップを拡充することで、シェア獲得に成功しました。

## 不景気を乗り越えて新工場を軸に躍進

**1982年**▶ 世界的な同時不況によって国内需要も落ち込む中、市場の要求はさらに厳しくなることが予想されました。これに対応するべく、1982年に富田林工場が新設されました。富田林工場の竣工とともに本社工場でも自動化、省力化が強力に推し進められました。

1983年に入ると、世界的な不況はアメリカでの内需拡大から回復へと転じ、ヨーロッパ、そして日本国内も追従するように回復傾向となりました。具体的には、阪神高速東大阪線の建設に大量のトルシアボルトが採用されるなど、建設・プラント関係の鋼構造物の需要が高まりを見せ、シヤーレンチはもとより、それ以外の機器製品の需要も押し上げました。

後にラインアップが拡大された商品や、独自に進化させた商品の前身など、今のTONE製品の基礎とも言える商品たちが、この時代に多く発売されました。

## 高機能・高品質工具として「ファインツールシリーズ」を製品化

**1991年**▶ バブルの好景気に後押しされ、工具業界では高品位な上級モデルのニーズが高まりを見せました。強く、美しく、高機能な作業工具は、メーカーの威信をアピールする存在であったため、前田金属工業としても従来品とは一線を画すフラッグシップモデルを立ち上げることになりました。

そこで1991年に製品化されたのが「ファインツールシリーズ」でした。高精度で作業性の高い工具の評判は、右肩上がりで見せました。この設計思想を標準品の製品開発に脈々と受け継いできたことで、現在では標準品自体が高い評価を得て、幅広いユーザーに愛されています。



ファインツールセット

## 洗練された製品を揃え グローバル化の道を進む

**1998年**▶ 会社設立60周年を迎えた1998年、グローバル化を進めるにあたり、この年に品質マネジメントシステムの ISO9001を取得。これによって世界的な信用を担保することができました。2001年には環境マネジメントシステム ISO14001の認証も取得。環境保全に貢献する企業としても認知されるに至りました。また、主力品目である機器製品をグローバル展開するため、2002年に EU 加盟国の基準となる国際規格「CE 認証」をシャーレンチで取得しました。2004年に発売された独自のトルク制御による電動タイヤレンチ「8-90TW」は、当時の社会問題であった大型車のタイヤ脱落事故の影響もあり、優れた整備性に注目が集まりました。その評判は国土交通省の視察を受けたほどでした。2005年には電動工具 IEC (国際電気標準会議)規格による「CB 認証」を取得しました。

グローバル化が進む中で検討されたのが、コーポレートカラーの浸透でした。これまで使ってきた「赤/黒/シルバー」の配色を TONE カラーと決め、デザイン性にも注力しました。2006年にはシャーレンチ「GH」でグッドデザイン賞を受賞。これを皮切りに、デザイン面にも「TONEらしさ」が盛り込まれるようになりました。



シャーレンチ GH241AT



ここが  
転換点

## 「TONE」に社名変更 社会から広く認知される企業へ

**2012年**▶ 2012年2月、待望の河内長野工場が完成しました。開発・生産から販路の開拓までスピード感と一体感のある組織を構築するため、河内長野工場には製造・開発・品質保証のような工場に直結する部門以外にも、営業企画といった販売面を戦略的に計画する部門も集約されました。工場としての設備は、機器製品の膨大な部品を自動倉庫によって管理するなど、効率を徹底的に追及しました。



河内長野工場

河内長野工場には体験型ショールームも整備し、約4,000点にも及ぶ全製品を網羅した展示は、ハンドツールと機器製品を製造する総合工具メーカーとして、世間からの認識を高めることに大きく寄与しました。また、2012年11月には本社機能を利用性の高い大阪市浪速区に移転しました。

会社設立75周年、株式上場50周年となった2013年、かねてより進めてきたコーポレートアイデンティティ (CI)の一環として、社名をブランド名である「TONE」に変更しました。海外では「Maeda Metal Industry」という名称で呼ばれていましたが、国内外を問わず、すべて「TONE」に統一しました。

2014年、モデルチェンジを進めてきたハンドツール「次世代工具シリーズ」がグッドデザイン賞を受賞。外部デザイナーを介さず、社内デザインで受賞できたことはコーポレートアイデンティティを進める上で誇るべき成果となりました。また、フィードバックレンチがボーイング787の組立に採用されるなど、機器製品も素晴らしい躍進を見せました。

この年からモータースポーツへのスポンサー活動が本格化し、社会への認知度が加速していきま



次世代工具シリーズ

## これからの未来に向かって

**2015年**▶ グローバル化を推進する中、念願の海外拠点である TONE ベトナムの事務所と工場が 2015年 1月に完成。6月より本格稼働を開始し、グローバル化に向けての製造・販売・貿易の拠点が追加されました。

モータースポーツへのスポンサー活動は、好評を受けて盛り上がりを見せました。2017年には国内最高峰のGTレース「スーパー GT」でスポンサーおよびサポートを開始。ドリフト競技「D1GP」で継続するシリーズ協賛や、二輪の世界選手権の1つである「鈴鹿 8耐」では 2019年にスポンサーチームがクラス優勝を達成するなど、確実なイメージアップを果たすことができました。

魅力ある製品と高まるブランド力で、TONE はさらなる躍進へと突き進んでいきます。

### TONE 株式会社

本社所在地：大阪市浪速区湊町2丁目1番57号

従業員数：132名 資本金：6億500万円

事業内容：機械・自動車向けプロ用作業工具、建築・土木・産業用動力工具及びトルク管理機器の開発・製造・販売